

県内茶産地におけるチャノコカクモンハマキのジアミド剤、およびジアシルヒドラジン系 IGR 剤に対する薬剤感受性の実態と要因

利用対象: 茶生産者

- 近年、多発傾向にあるチャノコカクモンハマキにおいて、一部の農薬に対する薬剤感受性の低下が認められました。適切な農薬使用によって、高い防除効果を維持しましょう。

1. チャノコカクモンハマキにおける薬剤抵抗性の発達状況

- 北勢地域では、クロラントラニプロロール水和剤や、テブフェノジド水和剤に対する薬剤抵抗性の発達が、中南勢地域よりも進んでいます。
- 一部の地域では、フルベンジアミド水和剤およびシアントラニプロロール水和剤に対する、感受性低下の兆候が見られます。



表 1 県内産地で採取したチャノコカクモンハマキ 2~3 齢幼虫に対する、ジアミド剤およびジアシルヒドラジン系 IGR 剤の処理 10 日後の殺虫効果 (2017 年調査結果。n=30)

農薬の種類 (虫 28 ジアミド剤、 虫 18 ジアシルヒドラジン系 IGR 剤)	希釈 倍率	補正死亡率 (%)				
		四日市市	鈴鹿市	亀山市	松阪市	度会町
クロラントラニプロロール水和剤 (虫 28)	2000	59.5	64.9	63.9	89.7	94.9
フルベンジアミド水和剤 (虫 28)	2000	100.0	97.4	94.6	100.0	97.4
シアントラニプロロール水和剤 (虫 28)	2000	95.0	100.0	100.0	100.0	100.0
テブフェノジド水和剤 (虫 18)	1000	17.9	55.0	41.7	100.0	94.3

2. 県内茶産地における農薬の使用状況

- チョウ目害虫の防除を目的としたジアミド剤の使用頻度が高く、急速な薬剤抵抗性の発達の一因と考えられます。
- 北勢地域では、テブフェノジド水和剤と同じ系統であるメキシフェノジド剤の使用頻度が、中南勢地域に比べて高いことが確認されています。

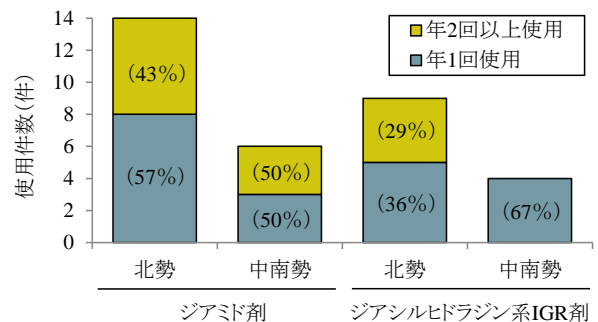


図1 現地におけるジアミド剤 (虫28)、ジアシルヒドラジン系 IGR 剤 (虫18) の1年間の使用状況 (2015年調査。北勢n=14、中南勢n=6。括弧内は割合を示す)

活用の留意点

- 今後の対策として、ジアミド剤およびジアシルヒドラジン系 IGR 剤の使用は、最大年 1 回までと制限して、薬剤に対する感受性を維持することが重要です。

お問い合わせ先	茶業・花植木研究室 茶業研究課 田中千晴 電話 0595-82-3125 中央農業改良普及センター 野村茂広 電話 0598-42-6707
参考になる資料	http://www.pref.mie.lg.jp/nougi/hp/74882027005.htm